

第4回千葉県地震被害想定調査検討会議 議事概要

1. 検討会議の概要

日時：平成27年3月18日 14:00～16:00

場所：千葉県教育会館新館 501会議室

出席者：構成員：大井昌弘、佐藤慶一、宍倉正展、中井正一、中村友紀子、藤本一雄、山崎文雄

事務局：内田防災危機管理部防災政策課長 ほか

地震被害想定調査業務受託業者

議事：(1) 地震被害想定調査の進捗状況

(2) 被害想定から千葉県の災害リスクを考える

(3) その他

構成員の意見等は次のとおり。

(1) 地震被害想定調査の進捗状況

- 千葉県北西部直下地震の震源位置と、地表震度分布や地表最大速度が大きくなっている位置が異なっている。震源の上の震度は大きいと考えられるので、破壊伝播方向等を含め再検討してほしい。
- 断層図面における SMGA（強震動生成域）は、スケールが合っていないので、プレート境界、地表面、断層の位置等、3次元的にその位置がわかりやすくなるよう工夫をお願いしたい。
- 被害想定においては、最も被害が大きくなると予想される千葉県北西部でどの程度の被害が出るかが重要になるため、一部だけが特徴的な震度分布になるようなパターンはよくない。工学的基盤面での震度分布や、波形等を併せて示し、更に検討してもらいたい。
- 防災対策用地震の震度分布について、利根川沿いに震度6弱が分布したり、銚子で目玉状に震度が分布したりしているので、確認してほしい。
- 用語として、沖積層に対して更新統という言葉を使っているが、更新統であれば完新統を使うというようにどちらかに統一するか、括弧書きを入れる等した方が良い。
- 今回の被害想定では、きちんとモデル化されるということで、具体的な谷筋等も考慮してやっていることは非常に良いが、モデル化をルーチン的に行うと、河川幅の変わらない運河ができてしまう。既存の研究結果等を踏まえて、作ってもらおうと良い。
- 地盤モデルにローム層がないものがある。

(2) 被害想定から千葉県の災害リスクを考える

- 「リスク」は、国際規格の中で「目的に対する不確かさの影響」や「ある事象の結果とその発生の起こりやすさとの組み併せとして表現されることが多い」と定義されており、損失する可能性のことをいう。

- リスク（損失の可能性）の発生には、資産・脅威・脆弱性の3つが要素となる。
- 3つの要素のうち、資産（千葉県でいえば県民）や脅威（被害想定でいえば地震や津波）を除去するということは不可能であり、リスクを一番減らすためには、脆弱性を減らす必要がある。
- 防災対策に取り組むときには、資産を守る目的をよく認識し、守りたい資産を脅かす脅威がどんなものか、脅威によってどんな損失が生じるのかを踏まえ、脆弱性をどのように解消していくのかというプロセスが、リスクマネジメントになる。
- また、防災対策に取り組む目的が全く達成できない状態は、「最悪の事態」ということになり、目的を達成するために、悪い方に積極的に目を向けようということになる。一方で、最悪の事態は、県、市町村、個人等、その主体にとって同一ではないのが難しいところである。
- 千葉県の被害想定では、県民や県民の財産、それによる経済被害等の資産を対象とする一方で、個人レベルになると代替不可能なものが資産であることを良く知る必要があり、被害想定でハザードとしてどのようなものに襲われるのか、それによってどのような被害が発生するのかを知るとともに、どのようなリスク（悪い結果）を避けたいのかを考えることが大切である。
- また、被害想定をどのように県民の方々に信頼してもらうのか、さらに被害想定が信頼できるものであり、正しいものであることを知ってもらう必要がある。
- 防災対策は脆弱性を解消することだとすれば、まずは自分たちの県にどのような脆弱性があるのか、しっかりとした共通認識をもつことが大切である。さらに、脆弱性が解消できる場合には、誰ならできるのか、どの程度時間を要するのかを併せて伝え、認識する必要がある。